

用との組合せもあり、すべて干いもの人もいる。水稲面積の大きい人もいる。しかし、この産地の比較的経営規模の大きい農家の粗収益は、ほぼこの辺りではないだろうか。もちろん、調査した以外の農家で、企業的経営を営み、かなりの収入をあげている人もいるであろうが、その数は極めて少ない。

最後に、この産地がこれ程までに大きくなった理由を考えてみたい。この地域は日本で最も北の産地である。夏はサツマイモの生育には適切な暑さがあるが、冬はかなり気温が下がる。しかも、毎日晴天が続く、空気は乾燥する。このような条件により、サツマイモの収量は十分多く、干いもの乾燥もきわめて順調に進む。さらに、干いものに加工できる期間は結構長い。

先に、内陸部に向かうほど干いも原料の作

付割合がが少なくなると述べたが、この理由は「風」にある。海岸に近くなるほど風が強く、特に夕方になると息が苦しいほどの冷たい風が吹き付ける。そして、それは内陸に行くほど弱くなる。この風も産地発展の大きな要素であったと思う。この風により干いものはじっくり乾燥し、甘味が強い製品ができる。

また、産地の土壌は腐植の多い火山灰土壌である。このような土壌では澱粉が過度に蓄積せず、シロタ（澱粉過剰により糖化が間に合わず、干いも中に白い粉状質部分として残る。商品価値無し）の発生が少ない。このようなことが、大産地として発展してきた自然条件としての理由ではないだろうか。さらに、品種「タマユタカ」との出会いも大きかったであろう。

今後の発展を祈りたい。

ポテトの雨

シェークスピアとジャガイモ 浅間和夫

シェークスピアの戯曲に「ウインザーの陽気な女房たち」というのがある。

この第5幕5場で、フォルスタフという人物が、

My doe, with the black scurf? Let the sky rain potatoes; let it thunder to the tune of "Greensleeves", hail kissing-connits, and snow erygoes.

『黒い尻（シッポ）の雌鹿かい？（天を仰いで）ポテトの雨を降らせろ！ 円舞曲に合わせて雷を鳴らせ、薄荷（ハッカ）のあられを降らせて、肉桂の雪を舞わせろ！ 興奮の大風で吹きまくれ！ 俺はここへ隠れるから大丈夫だ』（三神 勲、西川正身 訳）

と言って、茂みから現れたフォードという人の妻を抱擁する場面がある。この戯曲はエリザベス女王の命を受けて作者が仕方なしに調子を下げて書いたものとされている。「ヘンリー4世」の中に出ていた同じフォルスタフという人物は、奇抜な考えを持っていて、色々な苦境を難なく克服していく能力があった。

しかし、この「ウインザーの陽気な女房たち」の中に出てきた彼はパツとしない。商人の女房連中に手玉にとられたり、酒につかった生活に明け暮れしている肥満した老騎士だった。だが、一面ではユーモアに富み、警句を発し、愛きようがあった。

ここでとり上げたいのは、フォルスタフの言う「レイン・ポテトウズ」のポテトウズはジャガイモかサツマイモかということである。

サツマイモとするのが正しいのであるが、ジャガイモと誤記されることが多い。研究社刊の土居、福原、山本監修の「英語歳時記」などでさえ、「ジャガイモの雨」と誤記されているが、正しくは「サツマイモの雨」なのである。ジャガイモは White potato または Irish potato と potato ことサツマイモと区別して呼ばれていた。17世紀当時のサツマイモは、娯楽であって、食べるに精力がつくと考えられていた。フランスでは、ナポレオンもこれを知ってか、妻のジョゼフィンが好むので、わざわざマルメイズンやサン・クルマーで栽培させた後、官邸の宴会に出させていた。このため、上流階級の人達の間にサツマイモ料理が流行し、パリ周辺では一時生産過剰になった、とも言われている。

（北海道立中央農業試験場主任研究員・浅間 和夫）